

# サロメと聖書

## ——情熱と受難——

日時 2021年7月3日(土) 13時

場所 うつのみや妖精ミュージアム

講師 井村君江(妖精ミュージアム名誉館長)

(1) \* 「サロメ」とはヘブライ語で「平和」フラヴィス・ヨゼフス「古代ユダヤ史」。

\* キリスト教の「聖書」福音書「マタイ伝」14章「マルコ伝」6章。「ヘロディアの娘」。

サロメは「ヨハネ斬首」の場面に登場——母王妃ヘロディアの希望通り、ダンスの代償にヨハネの首を所望し、皿に乗せ王妃に渡す、従順な乙女。(聖書には名前なし)。

〔宗教画〕(モザイク、彫像、円柱、絵画)

\* 寺院の壁絵やステンドグラスに、聖書の「ヨハネ斬首」の場面——「斬首」を待つ姿、13世紀中世時代には「皿の首」を運ぶ。サン・マルコのモザイク、ルオー、クラナッハ。〔風俗画〕(「サロメ」絵画約2180)

\* ルネッサンス期——華やかに「踊る」会の場——フィリッポ・リッピ、モロー、シュトック

\* 19世紀——作家詩や文学作品、ハイネ『アッタ・トロール』フローベル『エロディアード』、母王妃ヘロデがヨハネに恋混同。敵将フォロフェルネスの首とユーディットは剣持つ。

(2) \* オスカー・ワイルド(1854-1900)『サロメ』自分の意志でヨハネ口づけを求める。

オーブリー・ビアズリーの挿絵が評判「ファーム・ファタール」(運命を狂わせる女) 黒白

\* サロメは世紀末の象徴的存在。バーン・ジョーンズ家でワイルドと会う姉メイベル女優。

\* フランスの詩人マラルメは、サロメを主体に作品「エロディアード」を作品に書き評判。

\* ワイルドも詩作——筋は王妃の願で、サロメ王ヘロデの殺害を逃れ国外追放。砂漠暮す。キリストに会って信者。冬凍った川に落ち流水で首切断。「サロメの斬首」。ワイルドは、詩ではサロメや王の心理は描けず、演劇にする。フランスで1891年に出版。

英訳アルフレッド・ダグラス(ビアズレー不採用)「君の絵は日本的、僕のはビザンティン」

(3) 日本での波動

\* ウィーンで活躍の音楽家、リヒャルト・シュトラウスはオペラ『サロメ』を作曲。

ヘドウィツヒ・ラッハマンの独訳を、日本に合う劇とって紹介、森鷗外(明治42年)。翌年翻訳。

\* 日本の「サロメ」は、舞台を通し浸透。サロメ役を127回演じた松井須磨子と島村抱月。

\* 『サロメ』の最初の上演は、外国のハンター・ワッツ、横浜ゲイティ座(大正元年)。

サロメ劇の「生首への愛」や「七つのヴェールの踊り」耽美派文学、手品松旭歳天勝。

サロメはエロティックな女、奇怪な美、恐ろしい美。サロメがキリスト教の登場人物?

\* 三島由紀夫が初めて買った本——ワイルド、ビアズレー『サロメ』。

\* 日夏耿之介『院曲サロメ』(サロメ岸田今日子、三島由紀夫は森秋子)。

\* パッション(passion)には「情熱」(愛)と「受難」(死)の意味、『サロメ』の主題。